

やすいものであつたらう。しかし、元來仏教的因果律が過去世・未來世にかかわる以上、靈異記のそれも現世のみにとどまるものではない。後世、一般文芸にも根強く浸透した、生前からの因縁——宿業思想が当時すでにかなりみられることなどは、まず注意されてよい。

宿業の招す所にしてただ現報のみにあらず。徒に空しく飢多  
 死なむよりは、善を行ひ念ぜむには如かじ。(下11。上8、  
 下34などにも類文あり)

これは病苦や貧苦を自らの宿世の業と反省し、業報が後世に及ばないよう、善を修め、その罪障を消滅しようとするのである。ところで、この宿業思想がもつた一群の宿報譚がある。一人の美しい娘が悪鬼に魅入られとり殺されたという巷間の俗説に於て、撰者は「或るは神怪なりといひ、或るは鬼啖なりといふ。覆りて思ふに、なほ是過去の怨なり」と述べているが(中33)、たとへば、中卷三十、同四十、下卷二などはすべて、ある人が前世で何らかの怨を結び、その怨を現世ではらされるという内容である。靈異記では宿世の業による応報が、その実質は返怨とか復讐とかいったかなり直接的具体的なあり方で説かれるのが普通である。そしてかようなことがまた、宗教的世界であるはずの地獄における業報の様相にも現われている。たとへば、生前殺生したり人を害した者が、地獄に墮ちて直接その畜類や被害者に責めさいなまれるといった類の話が数例みえるが、地獄の業苦もここではかなり現世的次元で考えられているのである。

以上、靈異記の応報観についていえることは、それが思想とし

ては未だ十分に深化していない、より現実主義的なものの考え方でうけとられている、ということであろう。靈異記では、恩に報いるべきことをしきりに説くが、それもまた善因善果ということと結びつけて、庶民にうけ入れやすい内容であつたと思われる。ただ、たとへば釈智光が地獄の炎火に焼かれる個所に「極めて熱く苦しけれども、心に近づかむと欲ふ」とか「心に悪めども、なほ就きて抱かむと欲ふ」などという描写がみられ、ここには自らの業に引かれるという仏教的業報観の本質的なものが、かなりの確にとらえられているのであつて、上代人の仏教思想に対する敏感な反応をも、断片的ながら読みとることができるのである。

## シェリングにおける「悪」について

——特に自然の概念を中心にして——

堀尾 孟

悪は人間の主体の問題である故に、これを問題にする場或は視点そのものが先ず問題であるが、今はそれを別の問題として、悪を自然(Nature)から見てみる。しかしシェリングに限つても自然は甚々広義な概念であるから、所謂彼の『自由論』の中で、「我性が精神をもつ(die Selbstheit hat den Geist)」とか「精神的となつた我性(die geistig gewordene Selbstheit)」と言われる悪の成立過程、即ち自由を有せる存在者・人間の存在構造と

しての自然を一考してみる。

一般に可視的存在者の置かれて有る基底<sup>バシス</sup>、或はそれ等のあり方を含めた意味で自然とか自然界とか言われる。しかしその自然とは何を指示し意味する言葉であるのか。可視的存在者は個有の仕方<sup>マニエール</sup>で、然もその全体に於いて何等かの秩序が考えられる仕方<sup>マニエール</sup>で在るのみである。シェリングの此の書では、人間を含めた Wesen の斯る在り方は、その可能根拠を神の神自身についての知(自知)の中に有している<sup>ヘンテ</sup>とみる。今これを極く大雑把にみてみる。

神の実存はその場を必要とする。しかし神は「一切中一切」であるとすれば、斯る実存そのものが今神自身<sup>ゴット・ゼルベ</sup>であって、実存の場はその根底<sup>グンデ</sup>としてそれから区別される。根底と言ってもそういうものが在るのではない。在ると言い得るのは端的なる実存(Existenz)、「絶対的に見られた神」のみであり、根底は実存の場としての無、「特定の潜勢に於いて」見られた限りでの場(有)である。シェリングは斯る根底を「一者がそれによって生産されるものが自身また一者によって産み出される」と言い、これを「神の内の自然(Natur in Gott)」と言う。神の斯る存在論が一切の考察の基礎となる。

自知への予感を孕みつつ動く「根源的憧憬」(非実存なる自然そのもの、言わば実存そのものの裏面)に対応して、実存そのものに焦点(中心)が成立する(言わば自然の表面に於ける中心)。これは神自信の現実化された最初のもの、神の写像である(神の内の予見、言わば観念的体系の成立)。この焦点の成立に於いて同時に、神自身と神の内の自然とはそのあり方(全体が神である)

に於いて現実的、実在的<sup>レール</sup>な意味をもち(自然は潜勢であるが)相合する(神の愛の実現)。ここに於いて神自身(愛の精神)は「自由<sup>フリー</sup>に創造する全能なる意志」として、体系の中心から、今や単なる神の実存の裏面ではなく、現実的な神の領分<sup>ベリヒト</sup>である自然の中心へ働き出る(即ち Ein-Bildung。霊の成立)。領分<sup>ベリヒト</sup>というのは、神の内<sup>イン</sup>に於いて神(実存)の根底ではあるが、焦点の成立によって神自身とは独立したものと神自からに認められた自然である(斯る見方はアウグスチヌスともプロチヌスとも異り、又「悪い根本存在者」の否定、弁神論の根拠となるが省略する)。神は自からに独立なる暗い自然を分開<sup>アウフヘン</sup>して、形相面からは個的にして神に合すると同時に、その根底の面に於いて神に対して自立的なる個別的なるものを創造する。しかしこの事は自然から(我々から、即ち神は初めから何もかとして何処かに認められるのではないから)言え、個は「根底から発現する<sup>エマンツィアツィオン</sup>」のである。そこに所謂自然界が成立する(創造される)のである(第一の創造)。言わば先の観念的体系が客観的実在的体系に成るのである。この分開に於いて自然が暗い根底のままに留めることは、分開に対する閉じ籠りの努力となる。この故に根本的に非実在なる自然が「何か実的な現実的なもの」とみられ、体系の成立に向う意志(知)に対しては、「万物の実在性の不可解なる基底、盲目的なる欲動」と言われ、光に対する暗の原理とされるのである。これが Wesen に普遍なる我性、我意(Eigenwille)である。即ち神に於いては表裏一体なる神の実存と根底が第一の創造と同時に各々独自なる二原理として成立し、両原理の争いの過程に於ける必然的な一

の紐帯として *Wesen* が在るのである。必然という意味は、二原理の紐帯が *an sich* であるということ、従って自然界の中心(光、普通意志)に對しては周辺に位置することである。然るに人間は分開の終極として自然界の頂点(中心)に位置する。従って二原理の結合は *für sich* となる。中心とは正に全体として見られ得る位置であるから。この *für sich* が、つまり自然界を成立せしめている両原理がその眞の結合である中心に於いて超えられることが即ち自覚の成立であり、自由である。斯るあり方が精神である(第二の創造)。しかし同時に従来 *Wesen* にとって必然的な紐帯であった両原理が、自由の場で自覚されるということは、先ず個が個だけ (*für sich*) に留まることである。この事は先にも述べた如く、個そのもの(理念)は究極的には神の予見たる体系の中にのみ成立するのであって、全体との連関に於いて初めて個は個であるのに、一切中一切たる神ではなく、被造物(存在の条件を自己の中に有せぬもの、従って単なる自意識、自我を通してのみ普遍即ち体系の統一と関かるもの)である *Wesen* の *für sich* は、先ず「己は己だ」ということに成立することであり、それが精神界の出发点(基底)となることである。従ってこれは体系への方向に抗し、それを破ろうとする働きとなり、その意図(個の主張)とは逆に、実は元初的中心が光に未だ従属させられていなかった状態へ帰ろうとする盲目的な欲動、単なる非實在の憧憬の立場へ、自由によって立つことである。これが第二の暗の原理たる「二分の精神」であり、「悪の精神」である。この意味で「我が精神をもつ」とは、人間がその自由によって神に独立した自

然に立とうとすること(自由の濫用)、神の根底に立つことによつて自己が自己だけで直接に神と等しくなろうとすること(転倒)、非實在たる自然を實在たらしめんとすること、即ち悪なのである。

## Abhidharmadīpa にあける

### 心所の定義

吉元 信行

最近、有部阿毘達磨思想を理解する上において、經部的立場に立つて述作されたとされる世親の俱舍論に代わって、正統有部の立場を表明した衆賢の阿毘達磨順正理論が特に重要視されるようになった。この順正理論は梵本・藏訳ともに欠け、漢訳のみ現存し、またその註釈の皆無である等の事情から、その文献学的研究にも大きな支障を来してきた。ところが、順正理論と同じく、正統有部の立場に立ち、俱舍論を批判せんとする *Abhidharmadīpa* の梵本が発見されてから、この種の研究は大きな進展を見ることとなった。

*Abhidharmadīpa* (以下 *Dīpa* と略す) は偈 (*Dīpa*) とその註釈 (*Vibhāṣā-prabhāṣitī*) の二面から成り立っており、本論は藏・漢訳ともに欠け、梵本にもかなり欠損部分が認められる。また、本論は、衆賢の順正理論等を所依とするカンミール系正統有部の学系に属することは明かであるが、その著者についても判明せず、従って成立年代についても問題点が種々認められる。この